

KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第 75 号 平成 25 年 11 月 20 日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



神戸ポートタワー（4面）

有馬の人形筆

有馬温泉に関する資料は数多く存在しますが、有馬筆について述べた資料は少なく、その起源を確かめることはできません。古くから作られてきた有馬筆から考案されたのが有馬の人形筆と言われています。

延宝六（一六七八）年刊行の『有馬名所鑑』には当時の名物として筆頭に挙げられています。

その特徴は、文字を書こうと筆を立てると、筆軸の上端から人形が顔をひよこつと出すというものです。

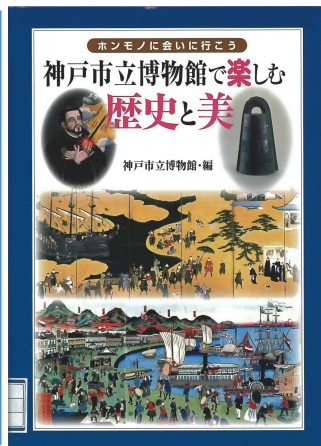
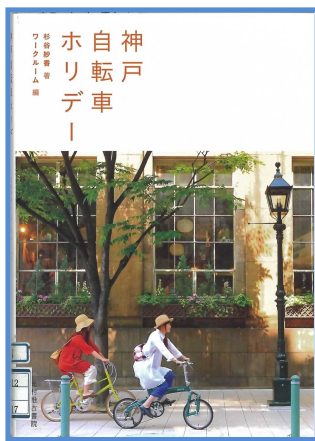
本居宣長も「有馬筆ひよいと出でたる言のはも人形よりはめづらしきかな」と、詠んでいます。

筆の玩具は全国でも例が無く非常に珍しいものです。

『えほん・コウベ』（広瀬安美著のじぎく文庫）には、製造過程が絵入りで紹介されています。筆軸を絹糸でかがるなど、すべてが手作業で根気の要る作業だとわかります。

習字嫌いのお殿様がこの筆で習字好きになり上達したという言い伝えもあり、今でも郷土玩具として親しまれています。

最近筆を手にすることがめつきり少なくなっていますが、この筆なら楽しく字が書けそうです。



神戸市立博物館で楽しむ歴史と美—
ホンモノに会いに行こう 神戸市立
博物館編(神戸新聞総合出版セン
ター)

美術館や博物館で、特別展は見
るけれど常設展は素通りする、と
いう人もいるかもしれない。

神戸市立博物館には、国宝
「桜ヶ丘銅鐸」を始め、清盛時代
の福原京の出土品や江戸時代の兵
庫津の古図、神戸開港時代の絵
画・写真など、神戸の歴史をたど
る資料が豊富に展示されている。
このガイドブックで、常設展示
の奥深さを再発見させられる。

神戸自転車ホリデー 杉谷紗香(光
村推古書院)

自転車に乗って神戸のまちを楽
しく散策するためのガイドブック。
定番の観光スポットをめぐる「お
でかけ自転車コース」など、三
コースにわけて紹介している。

安全に自転車に乗るためのルー
ルだけでなく、神戸ならではの
役立ち情報や駐輪場のデータなど
のトピックスのほか、沿線のグルメ
スポットやかわいなお店の情報も
満載。カメラを手にブラブラ歩く
のにも手頃な一冊になっている。

港町神戸鳥瞰図=Port city Kobe a
bird's eye view 2008 青山大介
(くとうてん)

鳥瞰図とは上空から地上を斜め
に見下ろす視点で描いた地図のこ
と。本作はB1サイズ一枚の図で、
神戸市街地の中心部を千六百分の
一縮尺で描いている。

一つの建物だけで三日、一日に
一cm四方しか進まないこともあつ
たという。すべて手書きの二十二
枚の図をつなぎ合わせて、完成ま
で三年半が費やされた。みなと神
戸の今だけでなく、積み重ねてき
た時間の流れをも感じさせる。



阪神間からの贈り物—人と文化の徒
然抄 阪神文化交流会編(神戸新聞
総合出版センター)

阪神間とは、広くは尼崎から神
戸市灘区あたりまでの六甲山のふ
もと地域をさし、江戸時代は酒造
りで栄えた。明治末期になると、
比較的温暖で風光明媚なこの地に
大阪の商人や神戸の貿易商が、住
居や別荘を構えるようになる。こ
の富裕層たちに支えられた作家や
芸術家が集まり、やがて独特のモ
ダンな文化が生まれた。

本書は、阪神間を愛する人々が
集う阪神文化交流会で行われた講
演と会員の随想をまとめたもの。
その内容は幅広く、講師や会員の
顔ぶれも専門家だけでなく経済人
や知事、落語家と多彩だ。
阪神文化やその気風を伝えたい
というそれぞれの人の熱い思いが
伝わってくる。

昔も今もこれからも兵庫を築く—あ
なたの近くの土木・建築ものづくり
兵庫県建設業協会編・発行

兵庫県内の代表的な土木建造物
七六、建築施設一七八を収録する
A4サイズの写真集。

「夕やけ橋」(神戸市中央区)、
「芦屋浜シーサイドタウン」、
「西宮神社」ほか、一ページに一
く二点ずつを取り上げ、所在地、
完成年、設計・施工などのデータ
や技術解説とともに紹介する。
記録と同時にガイドともなるこ
の本を手に、じっくりとその姿と
対面してみたいかがだろう。

播磨城主たちの事件簿 播磨学研
所編(神戸新聞総合出版センター)

室町時代から幕末までの間に播
磨の地を治めた大名たちについて、
それぞれの専門家が熱く語った講
演集。

取り上げられた大名は、赤松・
木下・黒田・池田・浅野・榊原・
越前松平・酒井の八氏九人。
五度にわたって転封され「引越
し大名」といわれた殿様、吉原の
太夫を身請けした殿様、江戸時代
最後の大老を務めた殿様など興味
深いエピソードが目白押しである。



福祉事業型「専攻科」E-COOL KOBEの挑戦 岡本正 河南勝 渡部昭男 編（クリエイツかもがわ）

特別支援学校を卒業した知的障害者の進路は、以前は作業所などの福祉就労や就職など、選択肢が限られることが多かった。しかし近年さらなる高等教育の機会をとこの機運が高まり、各地で「専攻科」を設ける学校や施設が増えてきている。

本書は二〇一一年長田区に誕生した「E-COOL KOBE」の立ち上げの経緯と苦労、各種実習や講義といった普段の授業の風景、野外活動、神戸大学の学生への研究発表と交流、喜劇などを手がけるプロの放送作家の全面協力による「えこーる新喜劇」の成功、そしてグアムへの卒業旅行にまつわるエピソードなどを紹介している

兵庫の平和史跡ガイド―戦争遺跡は語る 兵庫の「語りつごう戦争」展の会・兵庫歴史教育者協議会編著（日本機関紙出版センター）

戦争の痕跡を巡る活動を続けてきた編者たちが、活動のまとめとして、県下に今も残る戦争関連遺跡と資料館など、一二〇カ所を紹介する。

普段、何気なく歩いている町や場所にも、忘れてはいけない歴史があることに気づかせてくれる。

新・神戸の残り香 成田一徹 切り絵・文（神戸新聞総合出版センター）

平成八年四月から神戸新聞などで連載されたものをまとめたのが本書である。

前著『神戸の残り香』同様、名所旧跡以外で神戸らしさを感じるものを切り絵と文章で綴っている。旧神戸生糸検査所、鯉川筋の電柱、伝説の国語教師、名物ケーキなど、索引を見るだけで場所・人物・食べ物がいずれも浮かぶ。今も残る神戸の風景であれば、それを見に行きたくなる。

著者は昨年十月脳出血のため亡くなった。氏の新たな作品をもつて見られないのが残念である。

「その他の新刊」

神戸ビエンナーレ2013公式ガイドブック（美術出版社）

命のビザを繋いだ男―小辻節三とユダヤ難民 山田純大著（NHK出版）

「地域歴史遺産」の可能性 神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センター編（岩田書院）

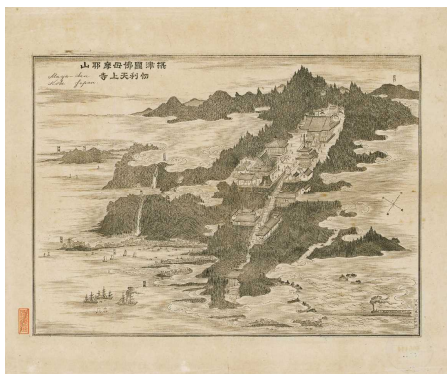
政令指定都市―百万都市から都構想へ 北村亘著（中央公論新社）

書庫探訪 その31

せつづくにぶつもまやさんとうりてんじょうじ
『撰津国佛母摩耶山切利天上寺』 明治30年頃

摩耶山にある切利天上寺は大化2年（646）に法道仙人が開創したと伝えられる名刹です。弘法大師が唐から摩耶夫人（釈迦の生母）の像を持ち帰り安置したことから、この山が仏母摩耶山と呼ばれるようになったといわれています。古くから信仰を集め、大正11年には参詣者のために摩耶ケーブルがつくられました。しかし、昭和51年の不慮の大火でほぼ全焼し、摩耶山頂北側の現在地に移転しました。

明治期、この寺を参拝した人々に土産品として売られたこの銅版画では、摩耶山中腹にあった寺社が雲間に浮かびあがるように描かれており、



焼失前の伽藍配置や長い階段を登って詣でる人々の姿に、ありし日の様子がしのべられます。山麓には、和田岬灯台や、明治7年に神戸大阪間に開通した路線を走る蒸気機関車の姿もあり、海には蒸気船や帆掛舟が行き交います。当時の神戸の情景までもが見て取れる寺社図です。

昭和三十八年十一月、完成したばかりのポルトタワーが神戸新聞に紹介されました。連載中の「兵庫百景」に、新しいタワーのある港の風景を描いた川西英は、翌年刊行された画集の中で「市民にはもとより、（中略）世界中に親しまれるようになりたいと願う」と書き添えました。

ポルトタワーは、神戸開港九十周年事業の一環として計画されました。港のシンボルとなるタワーの建設はその数年前から検討されていました。が、当時の市長、原口忠次郎が昭和三十四年に欧米を視察しロッテルダム港を訪れた際、竣工直前の高層タワーを見て、具体的な建設に着手するに至ったそうです。

昭和三十年代、経済成長とそれともなう貿易の拡大を背景に、神戸港では新たな突堤の建設と海面の埋め立てが続けられていました。戦前から日本を代表的する国際港であった神戸港は、戦後、接収されていた埠頭の返還が進むにつれてその勢いを取り戻し、昭和三十年代初めごろ

には外国航路の入港数、輸出入数量ともに戦前の最高値を超えています。このように経済の発展を支える港の現状やその機能を間近に眺め、関心を寄せてもらいたいとの意図から、建設地は港のほぼ中央にあたり、交通機関各線や商店街とも近く、人の流れが見込める中突堤となりました。

港を展望するための塔、という目的がこのタワーのデザインを方向づけることになりました。採用されたのは、上に向かって細くなる尖塔型ではなく鼓型。下から三分の二あたりの位置が最も細く、そこから上下に広がる形は最上部に展望室を配置するのに適しています。鼓型が描く緩やかな曲線は、一本一本はまっすぐな鋼管を組み合わせることににより表現されています。これを外筒とし、内側には展望室やエレベーターホールを収めた内筒を配しています。

全面的に用いられた鋼管構造は、独特の意匠を形にするだけでなく、風の抵抗を受けにくく耐腐食性にも優れていました。デザイン、構造ともに当時としては類を見ないものであったため、耐風、耐震性能は綿密に解析され、精巧な模型を用いての実験も行われています。

タワーの色は当初シルバー一色の

計画でしたが、航空法上不適当であり、また天候によっては景色の中に映えないことから再検討されました。高層建築物の塗装に関する法の規定と美観とを考慮した結果、外筒はほぼ赤一色、内筒その他は白に近いグレーとなりました。

前例のない構造を実現し、市のシンボルとして求められる機能が無駄なく形にしたポルトタワーは、昭和三十八年度の日本建築学会賞を受賞しています。

ポルトタワーの開業は昭和三十八年十一月二十一日。雲ひとつない晴天の下、地上約百メートルの展望台からは、当時荷役を担った舢舨や大小の船が行き交う港内だけでなく、大阪湾や淡路島をも一望できます。市街地を囲む六甲山系は紅く色づき、訪れた千五百人の目を楽しませました。来場者数は順調に伸び、十カ月で百万人を突破。多くの人で賑わう観光スポットとなりました。

神戸港をめぐる風景はその後、ポルトアイランドの造成やメリケンパークの整備などにより大きく変貌します。ポルトタワーは近隣の海洋博物館やホテルとともに、港だけで

なく街を代表する風景のひとつとなります。山や海から神戸を遠望するとき、このタワーを探してしまう人も多いのではないのでしょうか。

平成七年の阪神・淡路大震災で、岸壁の崩れた中突堤にあっても、このタワーは大きな被災を免れました。約一カ月後の二月十四日にはライトアップを再開します。人影もまばらな中、灯る静かな光には復興への願いがこめられました。そして平成二十三年の東日本大震災時には、被災地に向けたエールを点灯しました。

土地の象徴となるランドマークは、地形や建造物といった物理的条件だけでなく、そこで過ごす人たちの記憶の蓄積により形作られていく面があります。タワーを見上げた経験、その展望台から見た景色、それぞれの時間が積み重なって、どこか郷愁にも似た親しみがより大きく育っていくのでしょうか。

神戸ポルトタワーは今年、五十周年を迎えました。

参考 『神戸ポルトタワー』神戸港振興協会 『建築雑誌』九四三号 ほか